

ファッションの情動性が人間の心理生理に与える影響
The Effects of emotionality arising from clothing and fashion on psychological and
physiological responses of human body

小柴 朋子^{*1+}, 田村 照子^{*1+}, 永井 伸夫^{*1+}, 綿貫 茂喜²⁺, 森 由紀³⁺
Tomoko Koshiba^{*1+}, Teruko Tamura^{*1+}, Nobuo Nagai^{*1+}, Shigeki Watanuki^{*2+} and Yuki Mori^{*3+}

*1 文化女子大学服装学部 東京都渋谷区代々木 3-22-1

Faculty of Clothing Science, Bunka Women's University,
3-22-1 Yoyogi Shibuya-ku, Tokyo, Japan

*2 九州大学芸術工学研究院

Faculty of Humanity, Kyushu University,

*3 甲南女子大学人間科学部

Faculty of Human Science, Kohnan Women's University, Japan

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract : Fashion brings pleasure to people and provokes strong emotions in them. It is difficult to reveal any physiological effects that fashion may have on the human body. These days, methods which objectively measure the effects of stimulation on the physiological activity of the human body have been developed. In this study we evaluate how fashion affects the psychological and physiological activity of the human body and attempt to measure the effects that wearing clothes or looking at fashionable clothes have on this activity. For this, we conducted four different types of research.

First, we invited experts in the psychological and physiological research fields to give lectures. It became clear through their lectures that psychological surveys related to fashion and self-conception, and multiple physiological indices of stress tests were important.

Second, we reviewed psychological research about fashion in journals and reports over the past 30 years and lectures given by researchers. Although much research had been done, we found that the types of people used for the research were limited, and questionnaires were not uniform. It became clear that it is important to clarify the physiological variability that fashion has on depressed subjects and to learn more about the psychological effects of fashion on various types of people. We also learned that using multiple physiological indicators for stress experiments is important, and that psychological research focusing on the impressions that fashion forms and the relationship between self-concept and fashion are needed.

Third, we extracted questions about fashion consciousness, pleasantness and stress from literature over the last 30 years and considered their psychological effects. From these, a

* 1) koshiba@bunka.ac.jp

questionnaire was compiled.

Finally, we conducted several psychological tests and wearing tests using physiological markers to clarify how fashion affects the human body. We found that when people wear their favorite clothes, stress caused by anxiety decreases, the parasympathetic nervous system is activated, and salivary sIgA concentration increases. Other experiments showed that salivary alpha amylase activity increases due to stress caused by wearing thongs, panniers or other minimal coverings. It was suggested that people's level of emotion can be determined by measuring psychological and physiological markers.

要旨：ファッションは、人に心から湧き上がるような高揚感や強い印象を与える。しかし、その時、人の体にはどんな生理的変化が生じているのかについて明らかにすることは容易ではない。

近来、感性を生理学的に評価する手法が開発され、様々な分野で応用されるようになってきた。この先進的な客観的評価法を応用し、ファッションによる人体影響を心理生理学的に計測して、服飾による心の変化の客観的把握をめざすことを目的とした。

研究内容は、以下の4通りである。

1. ファッションに関する心理学・生理学的研究分野の第一人者による研究内容紹介の講演会を開催した。自己概念と衣服との関係に着目した心理学的研究の必要性、複数の生理学的指標を用いたストレス実験の重要性が明らかとなった。
2. 心理学的手法を用いたファッションに関する過去30年間の学会誌・紀要に掲載された調査研究を対象に、レビューを行った。その結果、多様な研究が行われているものの、調査対象者が限定されているものが多く、質問項目にバラつきが多く統一性が無いことが明らかとなった。年齢・性別の広汎な対象者に対して、ファッションに対する意識を調査し、ファッションにより意識が高揚する場合の条件について明らかにし、さらにストレスフルな被験者を対象にファッションにより生理的に起こる変化を実測する必要性が明らかとなった。
3. 従来の文献から、ファッション意識、ファッションによる快・ストレスについての質問項目を抽出し、心理的尺度について検討した。服装に関する関心、自我意識、ファッションによる快・ストレスについてのアンケートを作成、配布、集計した。
4. ファッションがいかに人体に影響を及ぼすかについて、心理・生理的計測項目を取り入れた被験者実験を行った。好きな服と嫌いな服を用いた実験より、好みのファッション着用が、不安によるストレス減少、副交感神経活動の亢進、s-IgA濃度の上昇をもたらすことが観察された。その他にも、肌の露出、Tバックショーツ、パニエなど、心理的に影響が大きいと思われる着装をした時の唾液中α-アミラーゼ活性が上昇することが示された。生理的評価法を用いて情動性を観察する可能性が示された。

配当決定額

平成20年度	330,000円
平成21年度	480,000円
平成22年度	260,000円
合計	1,070,000円

研究の目的

服飾が人の心を豊かにし、また豊かな人の心の反映が服飾であるとすれば、人の心の平安と

衣服との関係は密接である。また心の状態は身体に影響を及ぼす。衣服は今や身体の一部として、人の一生の時間のほとんどを身体の内側で存在するため、その心身に及ぼす影響は計り知れないところがある。意識する、しないに関わらず、人体を取り巻く環境として、他人との関係性を左右する標識として、服飾の果たす役割は非常に大きい。

ファッションは、人に心から湧き上がるような高揚感や強い印象を与える。しかし、いかなる服装が人の心を捉え、その時、体にはどんな生理的変化が生じているのかに対しては、多くのファッション関係者が関心をもつところであるものの、明らかにすることは容易ではない。

従来は、服飾に対する感性は、主として言語により主観的に評価されるのが一般的であった。服装心理学の研究領域における、服飾が人に及ぼす心理的な影響についての研究分野や、布や衣服が感覚に及ぼす影響についての被服材料学的な研究分野では色や手触りなどについて、官能評価法を用いた研究方法が多く展開されてきた。しかしファッションとしての実体の服飾に対して系統的に研究されている事例は多くない。また、客観的な評価法をファッションに応用した事例は殆ど見られない。残念ながらファッションの心理的効果と生理的反応についての研究の蓄積は多いとはいえない。

幸いにも近来、感性を生理学的に評価する手法が開発され、様々な分野で応用されるようになってきた。当研究ではこの先進的な客観的な評価法をファッションに対する心理測定に応用し、ファッションによる人体影響を心理生理学的に計測して、服飾による心の変化の客観的な把握をめざすことを目的とする。従来、心理的に好き嫌いで評価されていたファッションを、人体への影響という視点で数値化し、客観的にファッションに対する印象を比較できることの可能性を探る。特に注目度の高いファッションや好感度の高い服装などについて、人体に及ぼす効果を明らかにすることにより、新しいファッションクリエイティブへの着目点の示唆を得、個人による差、地域差・年齢差などファッションに対する感受性の集団としての特性の解明や、国際間でのファッションに対する共通の評価法として提案するための基礎データを得たい。

研究の方法

研究を遂行するに当たって、4種の研究方法を用いた。

1. 共同研究会議を開催し、研究分野を分担して、検討課題に対して報告会を行う。心理学分野・生理学分野の研究者による講演会を開催する。
2. ファッションに対する人の意識についての心理学的手法を用いた調査研究を収集し、過去30年間の学会誌・紀要・企業報告書から収集し、レビューする。
3. その中から、ファッションによる快・ストレスについて、質問項目を抽出する。それらの質問項目を用いて、心理的尺度を考慮した上で、ファッションによる快・ストレスについての大規模アンケート調査を行う。ファッション性に対する人の意識調査を心理学的手法を用いて実施し、快あるいはストレスを感じる場合の典型的なスタイルを抽出する。
4. アンケート調査をもとに、快あるいはストレスを感じる場合の典型的なスタイルについて、着用者が快あるいはストレスを感じる服装を実際に身につけた場合、あるいは第三者が見た場合の、人体への心理的効果や生理的影響を観察する。

研究の実施計画

[20年度]

- 1) 歴史的な服飾史料や現代のファッション誌から典型的なスタイルを抽出する。服装史や服装心理学のアドバイスを得る。図書館、博物館資料、情報機関のアーカイブ等を利用する。
- 2) 1) から選択されたスタイルに対して、ファッション性に関するアンケートや官能検査法などを行い、心理学的手法を用いた意識調査を実施する。
- 3) 2) から得られた結果から、快あるいはストレスを与えるファッションを選択する。
- 4) 生理的測定のための予備実験を行い、実験の手順書を作成する。
 <生理的測定法>アイマークレコーダによる視点移動観察、心拍数・呼吸数・血圧・皮膚温・唾液中ストレスマーカー計測法、心電図から心拍変動、唾液中のストレスマーカー分析から生体指標の変動の観察法、自律神経活動、免疫性反応の評価法。

[21 年度]

- 1) 共同研究会議を開催し、研究分野を分担して、検討課題に対して報告会を行う。
- 2) ファッションに対する意識調査の検討①ファッションへの興味、自尊感情との関係、ストレスとファッションの関係についての調査。質問紙調査(心理学的手法による)質問紙項目:論文調査により、ファッションに関する質問項目を抽出、質問紙を作成。②聞き取り法調査 対象者:ストレスが多いと予測される職業の集団に対して調査。
- 3) ファッションが及ぼす生理的影響評価
 - ・着用者が快あるいはストレスを感じる服装を身につけた場合の、人体への心理的効果生理的影響を観察する。被験者は大学生とし、生理学的指標として心電図、唾液中コルチゾール、sIgA、アミラーゼ、心電図から心拍変動、唾液分析からストレスマーカー変動を測定し、自律神経活動、免疫性反応を評価する。
 - ・肌の露出によるストレスの評価:アイマークレコーダによる視点移動観察、心拍数・呼吸数・血圧・皮膚温・唾液中ストレスマーカーを計測。同時にそれらの着装状態を第3者が見た場合の生理的反応について測定を行い、分析する。
 - ・Tバックショーツ着用が自律神経反応に及ぼす影響:初めて着用する人、履き慣れている人が、Tバックを着用し、鏡で自分を見る、あるいは人に見られる実験を行う
 - ・パニエの着用がストレスマーカーに及ぼす影響:パニエを着用したことのない被験者の着用前後の唾液アミラーゼ活性を測定する実験を行う。

[22 年度]

- 1) 服装心理学領域の研究から、ファッション行動と意識の変遷について研究された文献を review する。心理評価における質問項目の抽出を行う。ファッションに対する意識調査質問項目を再検討する。質問紙を作成、配布および回収:福岡・神戸・東京。研究協力者および研究補助者でのデータ入力、および研究構成員によりデータ解析。解析結果からの検討:研究会の実施。
- 2) ファッションが及ぼす生理的影響評価
 - ・ファッションの嗜好性が唾液中のストレスマーカーに及ぼす影響:好きな服と嫌いな服を着用した時のストレスを心理的・生理的に評価。測定項目、唾液中αアミラーゼ、分泌型免疫グロブリン A (sIgA)、心拍変動、STAI (状態・特性不安検査)。
 - ・肌の露出がもたらすストレス評価:露出程度の異なる上着を着用し、鏡に映る自分を見つめ、さらに鏡の横で第3者が見つめる実験

研究の成果

1. 共同研究会議および講演会の開催。

■第1回研究会 平成21年1月29日(木) 15:30~17:30 文化ファッション研究機構会議室(F館4階)

内容:文化女子大学現代文化学部健康心理学の野口京子氏と安永明智氏から、心理的な研究手法についてのアドバイス。fashion への欲求に関する先行研究を調査し、研究の背景を探る。

■第2回研究会 平成21年3月9日(月)10:00~12:15 文化ファッション研究機構会議室(F館,4階)

資料:ストレスとバイオマーカーの挙動に関する文献収集。唾液ストレスマーカーに関する文献収集。ファッションの情動性に関わる因子を抽出・整理するための方法を検討、いわゆる勝負服を提示させ、生理学的指標を測定する。好みの服、部屋着、ダサイ服着用時の HRV と唾液中ストレスマーカーを測定する。

■第3回研究会 平成21年4月25日(月)13:00~16:00 文化ファッション研究機構 会議室(F館,4階)

内容:ファッションに関する心理学的研究手法と研究課題例の紹介。POMS, VAS, QOL, VAS, SF-36 などがある。健康心理学領域で用いられている理論として、ストレスのメカニズムとストレスコーピング, カウンセリングによる効果の段階変化, 情動を象徴するキーワードなどの紹介。ファッションに関する生理学的研究手法と研究課題例の紹介。衣服による圧迫がホルモンに及ぼす影響, 衣服の色, 配色, 模様が生理・心理におよぼす影響。衣服によるストレスと各種ストレスマーカー(アドレナリン, コルチゾールなど)の挙動。各種刺激による生理学マーカーへの影響:脳波, 自律神経, 尿中および唾液中ホルモンや免疫物質におよぼす, 衣服の色の影響。

■第4回研究会 平成21年7月18日(土)13:00~15:30 本館A084

内容:心理学的研究内容の紹介。女子学生の服装行動が自尊感情に与える影響:自尊感情の多面的階層モデルについて...自尊感情は身体的ないくつかの要因により形成される。服装と自尊感情の関連性について検討してはどうか。何が変わって自尊感情(self-esteem)に変化が現れるか...介在する black box を解明する。心理評価における質問項目の抽出については, Rosenberg (1965) の自尊感情(self-esteem)の評価用質問紙を用いる。文献紹介。女子学生のファッション意識・行動に関する文献(ファッション環境, ファッションビジネス学会誌, 繊維機械学会誌, 日本家政学会誌など)の紹介。

■第5回研究会 平成21年9月11日(金) 13:00~15:00文化ファッション研究機構, 会議室 (F館4階)

内容:ファッション行動と意識の変遷に関する総説の作成について、分担文献 10 報の概要が説明された。かなり以前から類似した報告があることが明らかとなった。「日本人の美意識に関する研究 ~衣服のくずれ方が生理学的指標および心理学的指標に及ぼす影響~ (綿貫先生の研究より)」主観とは異なる生理学的動態がある。自尊心の高い人はファッションへの興味も強いという考え方と、自尊心の低い人が自己の意識を高めるためにファッションへの欲求を高める、という考え方がある。

■第6回研究会 平成21年11月3日(金) 14:00~16:00、文化ファッション研究機構, 会議室

講演会 九州大学大学院芸術工学研究院 綿貫茂喜教授 「情動と生理反応」

講演内容 :ストレス応答と自律神経系の活動:ストレス応答とは、外界からの刺激によって生体のバランスが崩れた際に、これを立て直すための生体の反応であり、様々なストレス反応の基盤になるのは、自律神経系である「視床下部-交感神経-副腎髄質系(SAM系)」、「内分泌系である「視床下部-下垂体前葉-副腎皮質系(HPA系)」, 並びに免疫系の反応と考えられている。自律神経系が賦活化されると、血圧の上昇, 発汗, などの反応が起こり, ストレスに対抗する。また, 内分泌系が賦活されると血液中にコルチゾールが分泌され, このことにより免疫系が抑制される。生体に及ぼす刺激が脳の視床下部に入力されると, 脳波, 心拍変動, 血圧変動, 内分泌系, 免疫系の反応が起こる。

■第7回研究会 平成22年2月13日(土) 14:00~17:00、文化ファッション研究機構, 会議室

公開講演会 放送大学 藤原康晴名誉教授 「心が変わると外見も変わる 外見が変わると心も変わる」

講演内容 :服装を通じた印象形成:対象人物の服飾に対する認知は, 未知な対人関係から, 対象への興味・関心の励起から始まり, 服飾の評価(状況, 社会的属性, パーソナリティ)の認知が行われる。

現実的自己概念は、「やや暗い」評価で、理想的自己概念は「かなり明るい」であり、そのギャップとして、現実的自己概念から理想的自己概念へ向かわせるものは「好きな衣服」を着ること。現実と理想の間にあるものとして衣服がある。自己概念の因子の、友好性・明朗性、情緒性、誠実性、活動性・意欲性のうち、服装の因子である、おしゃれ志向、実用性・着心地、保守性・慎み深さとの関連が見られたのは、友好性・明朗性とおしゃれ志向、活動性・意欲性とおしゃれ志向、誠実性と実用性・着心地であった。服装によって生起する多面的感情状態尺度の作成:衣服による感情変動を表す用語、尺度の開発:1 快活・爽快, 2 充実, 3 優越, 4 安らぎ, 5 抑鬱・動揺, 6 羞恥, 7 圧迫・緊張。^{1~3)}

■研究会を通じ、ストレスが自律神経系反応に影響すること、自律神経系の指標だけではなく、中枢性・内分泌系・免疫系の同時計測が望ましいこと⁴⁾、服装心理学分野では、服装によって生起する多面的感情状態の研究等が積み重ねられていること⁵⁾、質問紙調査における質問項目は多様で、服装と自尊感情についての関係性等が論じられていることなどが明らかとなった。ファッションから受ける心理的効果については、多くの研究実績があったが、特定の集団を対象にした意識調査の例は散見されるものの、異なる特性を持つ多くの集団を対象にしたファッションに対する意識調査の例は見られず、心理学的な手法を用いた系統的な調査の必要性が明らかにされた。また、ファッションの心理的効果と生理的反応についての研究の蓄積は多いとはいえなかったことが明らかとなった。客観的評価法を取り入れて生理反応を量的に測定する手法は、色や手触りなどに特定した場合に用いられ、ファッションとしての実体の服に対して応用された事例は殆どなかった。

2.服装心理学分野におけるファッションに対する人の意識についての心理学的手法を用いた調査研究を収集し、過去30年間の学会誌・紀要・企業報告書から収集し、レビューした。

1980年から現在までの約30年間の文献を学会誌・紀要・企業報告書から収集。223件収集した(表1)。分析項目は論文名、著者、雑誌名、巻・号・頁、発行年、対象、性別、年齢、対象者、調査方法、研究目的、調査項目、主な結果。223報中、調査方法、研究目的、調査項目、主な結果についての分析は70件に対し行った(発行年内訳 図1)。女性のみ対象43件、男女対象37件。高齢者対象10件、短大生大学生対象27件。調査項目の例:

意識しているファッションイメージ、考えと行動様式・関心度と実践度、購買行動・商店街イメージと買い物の仕方、性格特性・流行、広告、ブランドなど、生活信条、生活意識、衣生活意識、着用行動や衣服購買行動、被服の選択、購入、着装、おしゃれ意識、下着に対する恥ずかしさ、日頃の意識、捨てることへの躊躇、お気に入り
の下着の心理的効果、ファッションに対する意識・露出に対する意識、ファッション意識の合成、類型化、トレンドへの関心と評価 などであった。

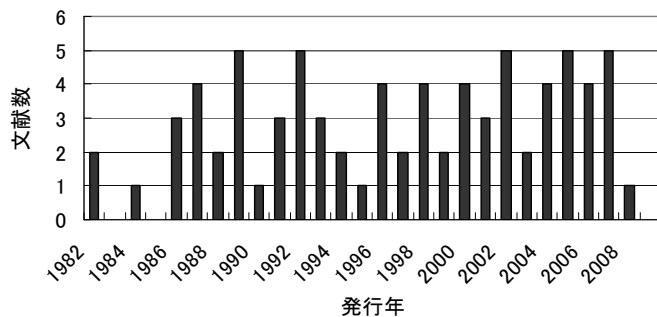


Fig.1 Number of research of each years 図1 調査した文献数

Table 1 Research for study

表1 調査文献

3. 2.の従来の文献から、ファッション意識、ファッションによる快・ストレスについての質問項目を抽出し、心理的尺度について検討。服装に関する関心、自我意識、ファッションによる快・ストレスについてのアンケートを作成、調査、集計。アンケート項目：年齢、性別、職業、経済状況、性格、現在の生活に対する満足度、自分のことをどのように感じるか、幸福感、自分自身のファッションへの関心度、他人のファッションへの関心度、外出着を選ぶ際の基準、服装によって「安らぎ」「優越感」「充実感」「爽快感」「抑うつ」「羞恥心」「緊張感」になるか、派手な衣服を着た時などの気持ち、服装によって、ドキドキ・ワクワクといった気持ちや気分になることがあるか、どのような服装をした時にそのような気持ちや気分になるか、非日常的な衣服を着てみたいと思ったことがあるか、1 か月にかける服装代の平均額。対象範囲を広げて、男女に対してアンケートを配布、集計する。

	論文名	著者	雑誌名	巻	号	頁	発行年
1	衣服のファッション化行動と自己概念の国際比較	神山八重子他	ファッション環境	3	2	1-10	1993
2	女子学生のファッション意識と衣生活行動	青木進佳	長崎県立女子短期大学研究紀要	45		47-57	1997
3	流行衣服の採用時期に基づく採用者カテゴリーの検討	藤原康晴他	ファッション環境	4	1	30-37	1994
4	女子学生のファッション志向性と態度特性との関連性	土田正子他					
5	ファッション商品に関する女子学生の意識	山本昌子他	ファッション環境	14		29-36	2005
6	被服心理学研究科会の研究活動 女子大生のファッション意識・行動に関する調査	中川早苗	繊維機械学会誌学会誌	45	11	565-574	1992
7	おしゃれ度軸によるマーケティング分析手法	鈴木郁史	ファッション環境	4		49-56	1995
8	女子学生のファッション志向性と刺激希求性との関連性	土井千鶴子他	ファッション環境	2	1		1992
9	女子学生および母親の購買行動における意識調査	熊谷伸子他	ファッションビジネス学会論文誌	3		25-32	1997
10	マチュア世代のファッション意識と購買行動	増田大三	ファッションビジネス学会論文誌	8		51-59	2003
11	施設入所高齢者のおしゃれへの関心と動機	石塚敬他	順天堂大学看護学部 医療看護研究	2	1	11-16	2006
12	高齢者活性化のための装いの条件	桑川美紀他	デザイン学研究	54	2	73-82	2007
13	生活活性化デザインとしての「装い」に関する基礎研究	桑川美紀他	デザイン学研究			252-253	2002
14	中高年のおしゃれ意識と規範意識	西藤栄子他	日本家政学会誌	55	9	743-751	2004
15	中・高年代女性のライフスタイルに関する一考察 一衣・食・住・遊・健の視点から	早川雅明・橋本千・弘津真澄・林仁美・豊田哲夫・針木文	ファッションビジネス学会論文誌	9		37-51	2004
16	高校生のライフスタイルと被服行動に関する一考察(第2報) 一高校生の被服行動特性について	冨江八重子他	ファッションビジネス学会論文誌	2		109-127	1996
17	高齢女性の被服行動に関する研究：長崎、福岡における女子学生との比較	庄山茂子 新原裕	日本生理人類学会誌	7	1	33-42	2002
18	ファッション・リスクの知覚と独自性欲求	神山 進 高木 修	日本衣服学会誌	39	2	15-26	1996
19	知覚されたファッション・リスクの低減法	神山 進 [他]	日本衣服学会誌	33	1	p5-14	1989
20	流行志向性とファッション・リスクの知覚	神山 進 高木 修	日本衣服学会誌	32	1	p22-30	1988
21	被服に対する意識の比較研究：韓・日女子学生の民族服に対する意識の差異	金由美 中川早苗	日本家政学会誌	49	4	417-426	1998
22	服装に対する評価の個人による再現性の違いとその表現への影響	高原康晴 宇野保子 中川敦子 福井典代	日本家政学会誌	50	10	1071-1077	1999
23	服装規範意識測定における個人差と個人内のあいまいさの検討	高原康晴 杉田洋子 福井典代	日本家政学会誌	50	4	371-375	1999
24	高齢者の生活意識と衣服環境 女性の年齢差と地域差について	田岡洋子・井澤尚子・高森壽・高藤祥子・青木進佳	京都短期大学紀要	35	1	17-39	2008
25	高齢者の生活意識と衣服環境 性差について	田岡洋子・高森壽・井澤尚子・高藤祥子・根梨純枝・青木進佳・高木くに子	京都短期大学紀要	34	1	39825	2007
26	日本と日系アメリカの高齢女性の着装意識と実態の比較	伊地知美知子	日本家政学会誌	54	5	377-385	2003
27	高齢者の自律と着装行動に関する研究-着装基準重視と関連する要因の検討-	田中優 秋山学 泉加代子 上野裕子 西川正之 吉川敬一	繊維製品消費科学	39	11	56-62	1998
28	高齢者の感情・行動意欲の活性化に関する基礎研究(第1報)：着装時における高齢者の感情・行動意欲の変化に関わる要因の検討	箱井 英寿 上野 裕子 小林 恵子	繊維製品消費科学	42	11	52-59	2001
29	高齢者の感情・行動意欲の活性化に関する基礎研究(第2報)：高齢者ファッションショーが高齢者の被服意識・行動に及ぼす効果	箱井 英寿 上野 裕子 小林 恵子	繊維製品消費科学	43	11	749-757	2002
30	高齢者の感情・行動意欲の活性化に関する基礎研究(第3報)：老人福祉施設におけるファッションショーが高齢者の情動活性におよぼす影響(高齢者の感想文より)	上野 裕子 箱井 英寿 小林 恵子	繊維製品消費科学	43	11	758-765	2002
31	ファッション・リスクに関する研究-1-「知覚されたファッション・リスク」の構造	神山 進 高木 修	日本衣服学会誌	31	1	p32-39	1987
32	ファッション・リスクに関する研究-2-ファッション・リスクの知覚に影響する個人的要因	神山 進 高木 修	日本衣服学会誌	31	1	p40-46	1987
33	新旧服装ファッションに関する女性の識別行動	土 香葉子 酒井哲也 酒井 豊子	日本家政学会誌	47	6	589-597	1996
34	女子大生の被服の関心度と自尊感情との関係	高原康晴	日本家政学会誌	33	10	189-196	1982
35	女子学生および中高年女性の服装に関する規範意識と独自性欲求との関連性	高原康晴 藤田 公子 山本昌子	日本家政学会誌	40	2	p137-143	1994
36	中高年女性のおしゃれ意識と規範意識	西藤栄子 中川早苗	日本家政学会誌	55	9	743-751	2004
37	韓国10代の青少年の自尊心と身体満足度が整形や服装行動に及ぼす影響	劉 敬淑・全 理蘭	日本家政学会誌	56	2	105-114	2005
38	女子大生のライフスタイルと被服行動(第1報) 日本の女子大生のファッション嗜好分類とライフスタイルとの関連性	阿部久美子・上野裕子	光華女子短期大学研究紀要	37		23-43	1996
39	高齢女性と化粧化粧の臨床心理学的適用の方法および実践	伊波和重・浜治世	繊維誌	53	6	P222-228	2000
40	老人ホームにおける衣生活とおしゃれ行動	小林茂雄	繊維誌	53	6	P229-236	2000
41	女子大生の被服の関心度と自己概念および自尊感情との関係	高原康晴	日本家政学会誌	37	6	p493-499	1986
42	体つき意識と生活行動 女性の着る衣生活を中心として	岡田 寛子	日本家政学会誌	43	1	34-44	1992
43	女子大生の伝統服に関する意識と行動：日本とタイの比較	松本仁雄 宇都宮由佳 滝山桂子 坂下 孝彦 岡田 秀幸	日本家政学会誌	58	12	771-780	2007
44	各年齢男女の衣生活行動	岡田 寛子	日本家政学会誌	52	7	605-616	2001
45	服装におけるイメージとデザインとの関連について(第1報)：イメージを構成する主要因子とデザインとの関連	渡辺 澄子 川本 栄子 中川 早苗	日本家政学会誌	42	5	459-466	1991
46	服装におけるイメージとデザインの関連について(第2報)：イメージによる類型化とそのデザインの特徴	渡辺 澄子 川本 栄子 黒田 善久枝 中川 早苗	日本家政学会誌	44	2	131-139	1993
47	女子短大生のかたちつきに対する意識とそれを形成する要因	布施谷 節子 高部 啓子 有馬 澄子	日本家政学会誌	49	9	1037-1044	1998
48	女子短大生の他者のかたちつきに対する評価	高部 啓子 布施谷 節子 有馬 澄子	日本家政学会誌	49	9	1021-1028	1998
49	女子大生と母親の着る着る意識について	香川 幸子 豊田 真千子 杉山 真理 小林 茂雄	日本家政学会誌	44	7	589-596	1993
50	女性の服装を評価する用語の分類(第2報)：服装評価による分類	藤原康晴 川端 澄子 近藤 信子	日本家政学会誌	41	3	241-248	1990
51	衣生活システムの理論的・実証的研究(第2報)サラリーマンの服装に対する規範意識の構造	中川早苗	家政誌	35		253-260	1984
52	衣生活システムの理論的・実証的研究(第3報)女子大生の生活場面と着装基準に関する研究	中川早苗	家政学雑誌	37	5	397-403	1986
53	被服購入時の選択要因に関する研究	有馬 澄子 雨林 さえ子	家政学雑誌	37	5	385-398	1986
54	女性の服装を評価する用語の分類(第3報)：服装評価次元の解釈の妥当性の検討	藤原康晴 川端 澄子 近藤 信子	日本家政学会誌	43	1	45-51	1992
55	高校生の服装と被服教育に対する意識に関する一考察-1-高校生の服装に対する態度について		日本家政学会誌	39	8	861-869	1988
56	女子短大生における被服行動の判断基準とその背景要因	坂上らち子	鹿児島県立短期大学紀要	57		45-68	2006
57	教員志望大生の被服購入時の意識と衣生活の実態	小林久美・長山芳子・松岡美和	九州女子大学紀要	41	1	11-26	2005
58	女子短大生のおしゃれ観にみる「おしゃれ」の構造	太田 新子	日本衣服学会誌	36	1	p41-54	1992
59	身体意識について 第1報ファッション意識との関連	宇野保子・近藤信子・中川早苗	中国学紀要	5	1月8日		1994
60	身体意識について 第2報独自性欲求との関連	近藤信子・宇野保子・中川早苗	中国学紀要	5		40070	2006
61	「イタリアの女子学生のファッション意識とライフスタイル」	廣田 勘治・小谷 利子・石井 富久	神戸山手短期大学紀要	47		B23-B44	2004
62	「イタリアの女子学生のファッション意識とライフスタイル」②	廣田 勘治・小谷 利子・石井 富久	神戸山手短期大学紀要	49		A9-A41	2006
63	消費者行動の分析に関する一考察 購買行動と性格特性の関係について	高橋 宗	愛媛大学短期大学人文・社会科学論集			35-48	1991
64	女子大生の生活意識と被服行動について	関元 美香子	山陰学園短期大学紀要	31		35-48	2000
65	被服行動の発達と身体発達との関連	相原 美保 布施谷 節子 高部 啓子	日本家政学会誌	56	2	115-123	2005
66	高齢者の被服行動に関する比較	布施谷 節子 李 善	日本家政学会誌	58	10	611-622	2007
67	新旧服装ファッションに関する女性の識別行動	富士香葉子・酒井哲也・酒井 豊子	日本家政学会誌	47	6	589-597	2005
68	女性の心理と下着に関する意識調査	ワールホールディングス				1-35	2007
69	2001年度版ファッション及びライフスタイルに関する意識と実態調査報告書	文化学園ファッションリソースセンター				1-141	2001
70	2002年度版ファッション及びライフスタイルに関する意識と実態調査報告書	文化学園ファッションリソースセンター				1-173	2002

4.快あるいはストレスを感じる場合の典型的なスタイルについて、着用者が快あるいはストレスを感じる服装を実際に身につけた場合の、人体への心理的効果や生理的影響の観察。

1) 「ファッションの嗜好性が唾液中のストレスマーカーに及ぼす影響」

好きな服と嫌いな服を着用した時のストレス評価。測定項目、唾液中αアミラーゼ、分泌型免疫グロブリン A (s-IgA)、心拍変動、STAI (状態不安検査)。被験者は 20~22 歳の女子学生 5 名。(図 2)

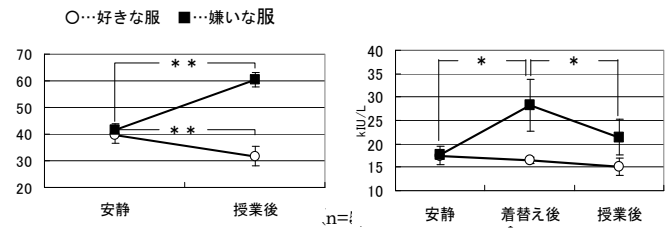


Fig. 2 Change of STAI value(Left) and salivary alpha amylase(Right) 図した時の 3 好きな服、嫌いな服を着用した時の STAI(A-Stage)の変化 (左図) と唾液中αアミラーゼ活性の変化 (右図)

2) 「肌の露出がもたらすストレス評価」…露出程度異なる上着を着用し鏡に映る自分を見る、第三者が凝視。被験者は 21~22 歳の女子大学生、唾液中αアミラーゼ活性を測定。(図 3)

3) 「T バックショーツ着用が自律神経反応に及ぼす影響」…初めて着用する人、履き慣れている人が、T バックを着用し、鏡で自分を見る、あるいは人に見られる。唾液中αアミラーゼ活性を測定。(図 4)

4) 「パニエの着用がストレスマーカーに及ぼす影響」…パニエを着用したことのない被験者の着用前後の唾液アミラーゼ活性を測定。(図 5)

好きな服と嫌いな服の実験より、好みのファッション着用が、不安によるストレス減少、副交感神経活動の亢進、唾液中α-アミラーゼ活性の上昇、sIgA 濃度の上昇をもたらすことが観察された。

露出、日常と異なる着装体験の実験からも、唾液中α-アミラーゼ活性の上昇が観察された。生理的評価法を用いて情動性を観察する可能性が示された。ファッションに対する感受性は個人差が大きい、今後心理生理的計測を用いた実験例が積み重ねられていけば、沈静化あるいは活性化など場面に応じた衣服への要求の定量的評価、高齢者や障害を持つ人へのファッションセラピーの心理的効果の客観的評価、言語を理解しえない者同志のファッションに対する共通の評価法など様々な方面への展開が期待できるものと考えられた。

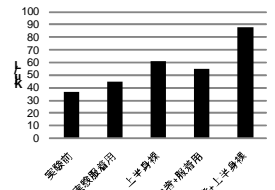


Fig.3 Salivary alpha amylase activity when minimal covering 図 3 肌の露出と第三者凝視の唾液中αアミラーゼ活性

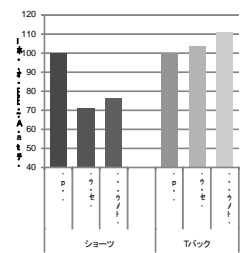


Fig.4 Relative value of salivary alpha amylase activity wearing thong 図 4 T バックショーツ着用時の唾液中αアミラーゼ (着用時を 1 とした相対値)

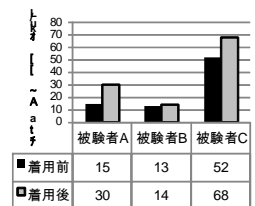


Fig.5 Salivary alpha amylase activity wearing pannier 図 5 パニエ着用前後の唾液中αアミラーゼ活性

[口頭発表]

小柴朋子、永井伸夫、田村照子：着衣による満足度が自律神経活動および内分泌反応に及ぼす影響、第 17 回繊維連合研究発表会講演予稿集、p 157 (2008)

永井伸夫、波多野南、小柴朋子、田村照子：ファッションの嗜好性が唾液中ストレスマーカーに及ぼす影響、日本家政学会第 63 回大会 (2011.5 発表予定)

参考文献

1. 藤原康晴ら:「服装に対する評価とその服装によって生起する多面的感情状態との関係」, 繊維機械学会誌, Vol.49, No.8, .197-204 (1996)
2. 藤原康晴:「女子大生の被服の関心度と自尊感情との関係」, 日本家政学会誌, Vol.33, No.10, pp. 189-196 (1982)
3. 藤原康晴 杉田洋子 福井典代:「服装規範意識測定における個人差と個人内のあいまいさの検討」, 日本家政学会誌, Vol.50, No.4, pp. 371-375 (1999)
4. 綿貫茂喜:「生理反応による感性科学研究」, <http://host.id.design.kyushu-u.ac.jp/ninkou/watanuki>
5. 藤原康晴 宇野保子 中川敦子 福井典代:「服装に対する評定の個人による再現性の違いとその表定値への影響」, 日本家政学会誌, Vol.50, No.10, pp. 1071-1077 (1999)